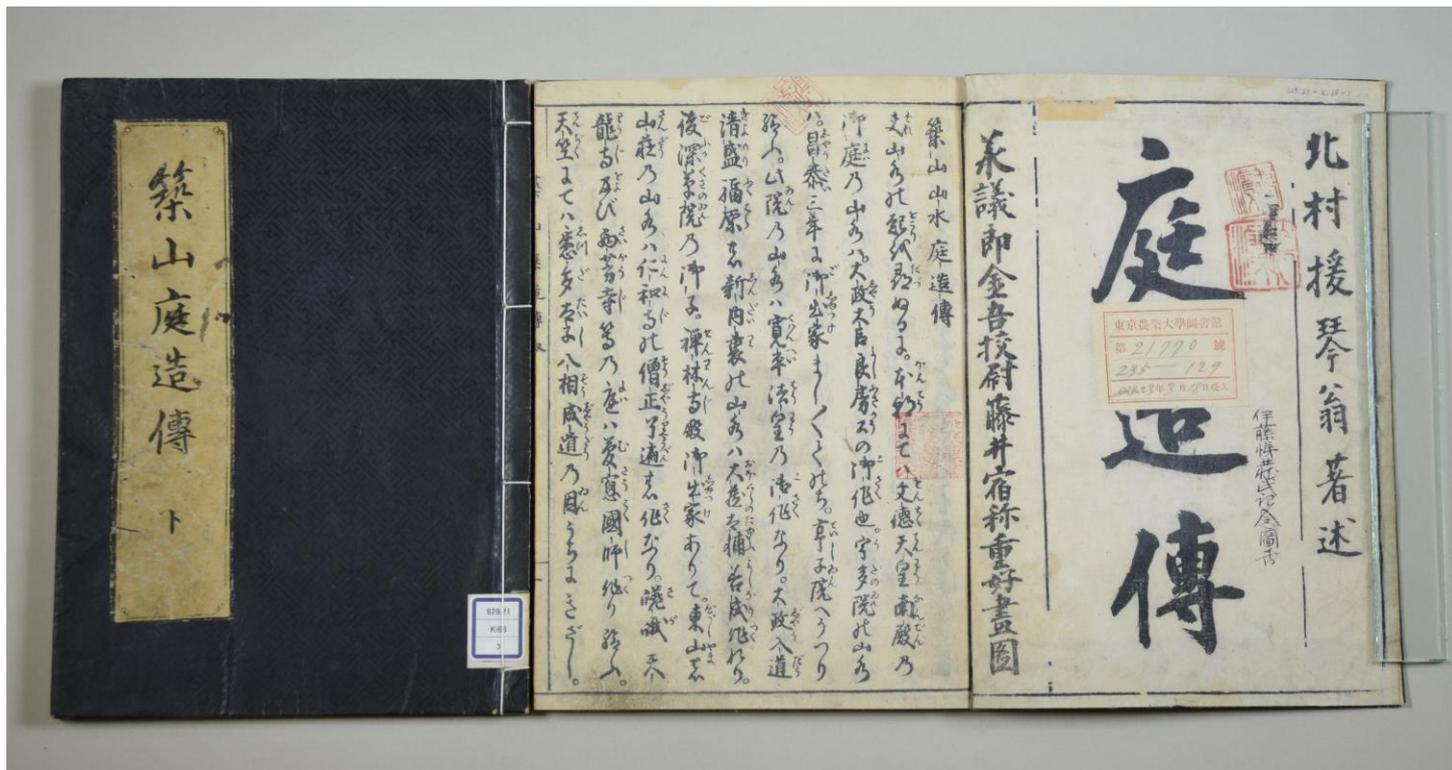


# 大学史資料室通信

- ◆図書館所蔵の造園関連貴重書の紹介 その三 『築山庭造伝全編』 鈴木 誠 教授
- ◆東京農業大学の人々（七）－納豆菌の発見者・沢村 真一 友田清彦 教授



『築山庭造伝』 全6巻3冊(\*)

図書館所蔵の造園関連貴重書の紹介

## その三 『築山庭造伝 前篇』

東京農業大学図書館には、造園関連の貴重書が数多く登録所蔵され、その内の三件は図書館HP「貴重書コレクション」の中で、電子画像データに変換され公開されている。

三件共に、その原本が秋里籬島の手になる江戸時代の版本である。これまでその内の二つ『都林泉名勝図会』（みやこりんせんめいしようずえ：一七九九、五巻六冊）、と『石組園生八重垣伝』（いしぐみそのうやえがきでん：一八二七、乾坤・二巻）を紹介した（第十・十一号）。

今回と次回では残りの一つ『築山庭造伝 前篇・後篇』（つきやまていぞうでん／つきやまにわづくりでん、一八二八、六冊）を、二回に別けて紹介したい。

本文紹介に先立ち、二つ知っておいていただきたいことがある。

まず第一に、『築山庭造伝』という書名の本が江戸時代に二つ存在することである。最初の本は享保二十年（一七三五）、北村援琴が著している。そして次はその九三年後の文政十一年（一八二八）、今度は秋里籬島が北村援琴著『築山庭造伝』に、自身の文章を追加再編して『築山庭造伝 前篇』（上中下 三巻）とし、秋里が執筆編纂した『築山庭造伝 後篇』（上中下 三巻）を加え

た前・後篇六卷セットものである。

次に第二として、東京農業大学図書館が所蔵しHPで公開している『築山庭造伝』は、大正七年（一九一八）の和綴じの復刻版だということである。復刻版だが、既に百年の年月を経ようとしてゐる。

### ○北村援琴『築山庭造伝』（一七三五、享保二十）

『築山庭造伝』、後に前篇と称されるものの元本は、北村援琴著・藤井重好画によって、自序享保二十年（一七三五）に版行されている。後年、北村援琴著『築山庭造伝』の元本自体が、『築山庭造伝 前篇』と取り違えられることがままあるが、秋里による再版の内容は若干異なりこちらのほうが広く世に知られている。秋里の版は中巻と下巻の後半部分が追補となっている。

農大図書館の貴重図書誌情報の解説には次のように記載されている。

「本書は庭園を造る場合の工案方式を示したもので築山、池の規格、山水真景の模写、庭面の陰陽、樹石の配置、苔蘚の生植、金魚の育養或は枯死せんとする松を活かす方法或は草木に結実を多くさせる方法、その他種樹◆挿等凡そ百余件、書中に図を挿入してある等誠に懇切に書かれてあり良心的な書物といえよう。本学図書館に蔵するものは大正七年の復刻版で前篇上、中、下、後篇上、中、下、の

六冊からなっている」

本の大きさは縦約二六センチメートル、横約十八センチメートル。著者である北村援琴については詳細不明であり、この『築山庭造伝』でのみ知られる人物である。

北村の元本の内容は庭づくりに必要な事項を七三項目にまとめて目録（目次）をつけ上巻に記述し、中下巻は主に図のみを掲載している。その図の数は四三例で、著名な庭園の図と各種の庭相図である。一方の秋里の版は図だけの元版に文章項目を追加している。中巻に十八項目、下巻に十二項目、合計二十項目にわたり実務的な内容を補強している。

北村援琴著『築山庭造伝』が出版された享保二十年（一七三五）は、八代將軍徳川吉宗（將軍在職一七一六〜一七四五）の治世時代であり、江戸時代中期にいたり庭園文化が華やいた頃であった。例えば、江戸時代の大名庭園の多くがこの頃には完成していたし、この時期にはまた、一般市民に開放された公共の庭園的空間も造られた。桜を植えて花見に供した隅田堤、飛鳥山、小金井堤のような公共の園地（今で言う公園）などであり、現在の墨田公園、飛鳥山公園、小金井公園に一部継承されている。

造園古書に詳しい飛田範夫（一九八四）は『築山庭造伝』は『嵯峨流庭古法秘伝之書』をまとめた上に、実際の庭づくりの工法を説明し、名

園のスケッチ図と理想とする庭園図を付けるという画期的な方法で好評であったようである。」（注一）とする。ここで触れられる『嵯峨流庭古法秘伝之書』とは室町時代頃に成立した作庭書で、一ツ書文章に規範となる庭の姿図一点を添えたもので、写本として江戸時代中期までにも数多くの異本が見られる（注二）。

### ○北村援琴『築山庭造伝』序文

本書の巻頭には「築山山水庭造伝叙」として序文が載る。序では我国の「山水」（庭園）の起源として、「本朝においては文徳天皇南殿の御庭の山水は太政大臣良房公の御作也」と、庭園と作者（ここでは藤原良房）を一緒に記述しつつ、「宇多院の山水」など皇族の邸宅、「東山の山荘」の山水、そして嵯峨天龍寺及び西芳寺等の庭は夢窓国師の作として、庭と作庭者が高尚・高貴であることを印象づける。

続いて、「天竺にては悉多太子……と出家前の太子であった釈迦を引き合いに出す。大王が王宮を出たがる太子を留めるために、宮殿の四方（東南西北）に春夏秋冬の山を造ったが、これが彼の地の山水（庭園）の始まりであると、仏陀との関係を強調する。これを模して我国では鳥羽離宮の四面に四季の山を作ったとする。しかし、時代を経て今ではそこには秋の山しか残っていないが、後に相阿弥という人が古法のごとく東山慈

照寺銀閣寺の庭、または大徳寺大仙院の庭などを作ったと続く。

そして、以上の文章を受ける形で、「今ここに往古達人の教えを始に記し、次に所々勝景の庭の図を摸(うつ)し、此道を好み給わん人の便りとなし侍るなり。」と結んでいる。

つまり、ここにあげたような名園を作った高貴な人々(往古達人)の教えを文章に整理し(上巻)、優れた景色をもつ名園の図を掲載して(中・下巻)、庭づくりを好む人の便宜を図る、ということの前触れのようなのである。

なお、序文著名は「洛下 北村援琴斎」となっているので、京都にて記すということなのだろう。ちなみに、中・下巻に収められた庭園図の具体的事例は京都周辺の庭である。

### ○第一項「山水作りやう法式」に示される

#### 庭づくりの基本

上巻には北村援琴が整理した庭づくりの心得、七三項目が文章表現されている。本文の項目見出しに番号は無いが、便宜的にここでは番号を付して解説する。

まず、第一項「山水作りやう法式」の内容を見てもみよう。この項は「庭づくりの基本」とでも言えるが、三つの基本に整理している。興味深い内容なので、その概要を三区分に従い読下して解釈してみたい。

〔読下し一〕庭づくりの第一には、地形をどうするかが重要である。地形によって庭の様子を決め、石を立て草木を植えて景色を表す。この現地形を見て作る庭を思い描くためには、普段から景勝地に足を運び、その概要を紙に写し描き、試みとして胸中でその姿を思い描いてみるべきである。こうした経験を積むと自然と巧みになる。ただし、景色を全て写しとろうとすると時間がかかり過ぎる、そこで景色を望み見る方法である庭坪地形の古法(左に記す)を参考にすべきである。以上が築山第一の伝である。

〔解釈一〕この第一の伝は、敷地の地形・有様がまず重要であること、そこに石や草木で庭を形づくるが、それには景勝地に習って作る庭を思い描くことが大切だということである。そして、景勝地の概要を紙に写すことを手早くするための、景色を望み見る方法がありそれが「庭坪地形の古法」によることだという。確かに本書中に「景地を望み見て写しようの事」と「庭坪の地形の事」という項目がある。

〔読下し二〕第二には、立石の吉凶、草木を植える所の善し悪しを旨とし(左に記す)、立石の据え方、組み方これは極秘事項である。(左に記す)たとえ狭い庭でも、優れて高い山を築き、大きな滝を落下させ、大海の景を現す手段は、ただ水石の用い方にある。以上が築山第二の伝である。

〔解釈二〕第二の伝は石を据える場所・草木を植える場所の重要性を、吉凶・善悪として掲載すること、また石の据え方・組み方の極秘事項も載せることに触れる。これに呼応して、第二項以降第八項までが「三忌五禍の石の事」「二祥三吉という事」「面(おもて)に植ざる草木の事」「蓬菜島に橋をかけざる事」「本所離別という事」「冬木枯木面前に植ざる事」「平野の事」「山水遠近の事」などが続き、石や草木の配置・配植のしてはいけない事を中心に項目立て解説している。

〔読下し三〕第三に真行草の格式によって庭の景趣を考える。それは庭の地形から生まれるのではなく、大体、木石を配し庭の景趣を心の中で考えて初めてできることである。平庭のなかにそこかしこに石を据置き、自然の巧みを現すことが庭づくりの極意である。

いかに模様どりを面白くして様々な景色があっても、趣が拙く形が整っていなければ、築山の真の意味がなく、それを造らせる主人の心まであさましく思われる。世の中の全ての物にはことごとく縁がある。文字に熟字縁字あり、言葉に熟語縁語があるのと同じである。これは自然の定理であり、これに背く事を離別という。今新しく物を造り出す時、心して考えなければこの縁が切れる恐れがある。ゆえに庭を造る際には模様だけに気をつけて、縁不縁の区別もなく、不注意に木石を並べる事は良くない。この事は数多くの書

籍に記されている。次にその大綱を示しておく。  
以上が築山第三の伝である。

この他にも口伝(秘伝)があるがこの三つ以上のものではない。よく注意すべきである。

〔解釈三〕第三の伝は、真行草の格式によって庭の景趣を考えることが重要としている。しかし、続く文章中にこの庭づくりにおける真行草の具体的な意味や内容は示されていない。説明の中では「庭の景趣を心の中で考えて初めてできること」「自然の巧みを現すことが庭づくりの極意」「世の中の全ての物にはことごとく縁がある」「心して考えなければこの縁が切れる恐れ」など具体性に欠けていて、庭の景趣を考えるに重要な真行草とはどのようなことかが、なぜかここでは明確にされていない。むしろ、江戸時代中期当時の感覚では「真行草の格」は一般常識であったか。さて、ここに登場する「真行草」、本書中ではこの他に三箇所記述が見られる。その三項目は「築山不相応の事」「山にある石の名の事」「庭坪地形之図」である。そして、真行草そのものに対する解説は「築山不相応の事」の項に見られる。この項は第九項に当たり、第一項から第八項までは第二の伝に対応した内容であり、その次に登場する。

しかし、その解説は「築山、立石には真行草の古法がある。昔に相阿弥が作成した図式をみて学ぶべきである。今出版され世の中に出回って

るので本書に掲載しなかった。」として、肝心の図式は割愛されている。しかも、「しかしあながち図式のごとく庭を作るのはよくないこともあり、古法を見て作意のもとに石を立てるべき」とも記している。なお、この出版され世に出回っている相阿弥作成の図式の詳細は不明である(注三)。時代状況から考えて『嵯峨流庭古法秘伝之書』に掲載されている図ではないかと思われる。

ちなみに、第十項は「築山泉水比喩の事」として公武農商の家々と仏者寺院等の庭とは分けて考え、その上で人々の好みに従うべきといった内容である。続く第十一・十二項は第一の伝と対応する「景地を望み見て写しようの事」「庭坪の地形の事」である。

### ○第一の伝「景地を望み見て写しようの事」

本書中でも文章量の多い項目である。景勝地の見方、写生の仕方が内容である。その方法は、正面より真中の景を見て上中下に見渡し、今度は左右に視野を移して同じように上中下と見渡し、それぞれに目立つものから写していく。山峰滝谷等も上中下の模様を写し、湖海川沢池等も向こう岸・中ほど・手前の岸と、いずれも三段に景を取るべき、だという。

この写生方法は前景・中景・遠景を意識し、左右の視野も中心視野と左右の視野とに三分しととらえる、という視覚原理にかなっている。また

自然景勝地の縮景再現といえる庭づくりのために相応しい景観把握法といえよう。

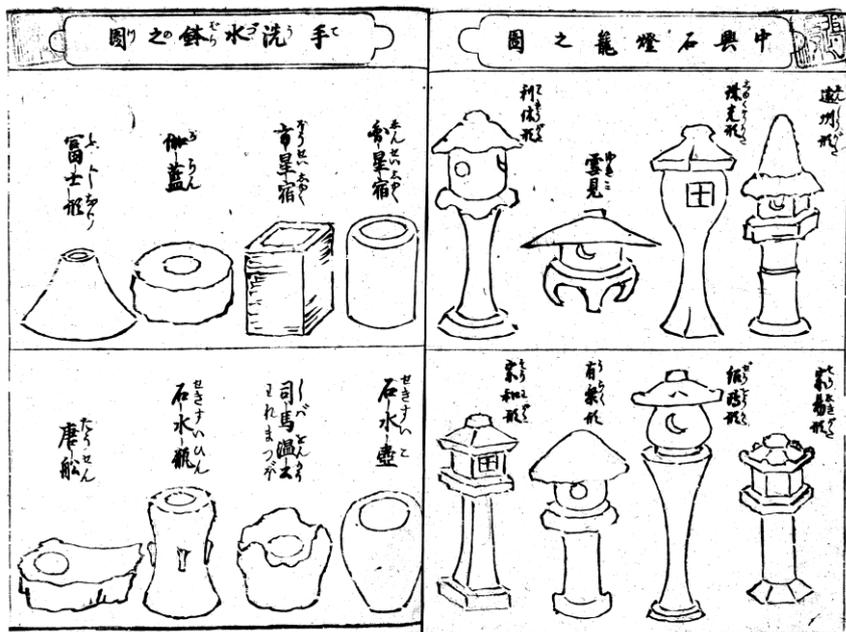
### ○『築山庭造伝』上巻の主たる内容

上巻冒頭の第一項「山水づくりやう法式」や第十一項「庭坪地形之図」に触れられる図自体は巻末近くに掲載され、第十二項からは庭づくりの禁忌事項と吉祥事項の説明、主題である庭園の各構成要素の配置やその構成。そして「真の山水に仏菩薩の御名を配当する事」「九品の次第」「仏菩薩御名の事」の項で一区切りとなるが、この三項目に関連しては見開き頁にわたる「仏菩薩の御名配当之図」が添えられている。

図は山容と汀線そして石組で描画したもので、組石それぞれに仏菩薩の名前が記される。図の中央上に見える三つの石の上には中央に「大日三尊」、左に「釈迦尊」、右に「弥陀三尊」とあり、その下の三石組の石には中央「弥陀仏」、左「勢至」、右「観音」の文字が記されている。

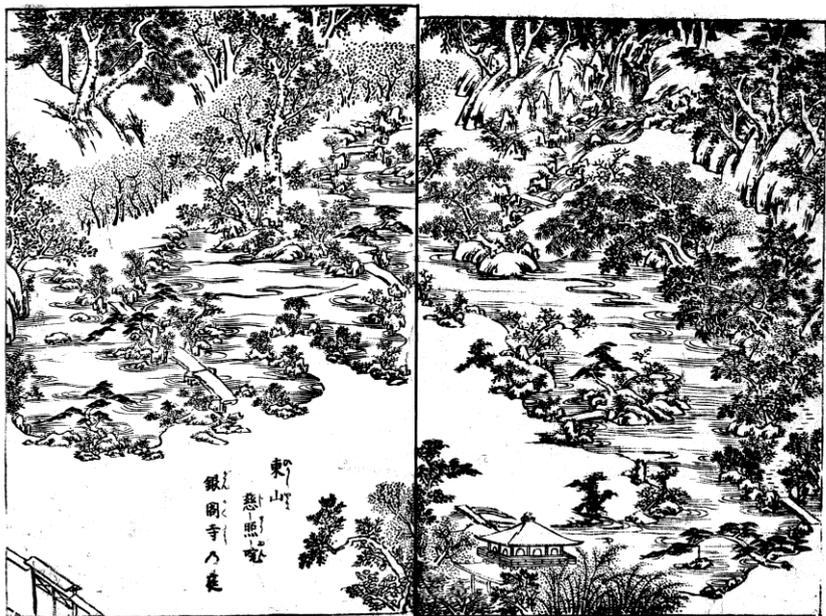
これは現在も良く知られる三尊石組を表すが、こうして全ての石に仏等の名前を付した石組は古庭園に見られるが、現在の庭づくりではあまり行なわれてはいない。ただし、自然石や石組を仏に見立てたり、その他様々なものに見立てることは現在でも行なわれている。続く「五大配当の事」は庭に地水火風空という五大を配当すべきとの説明である。





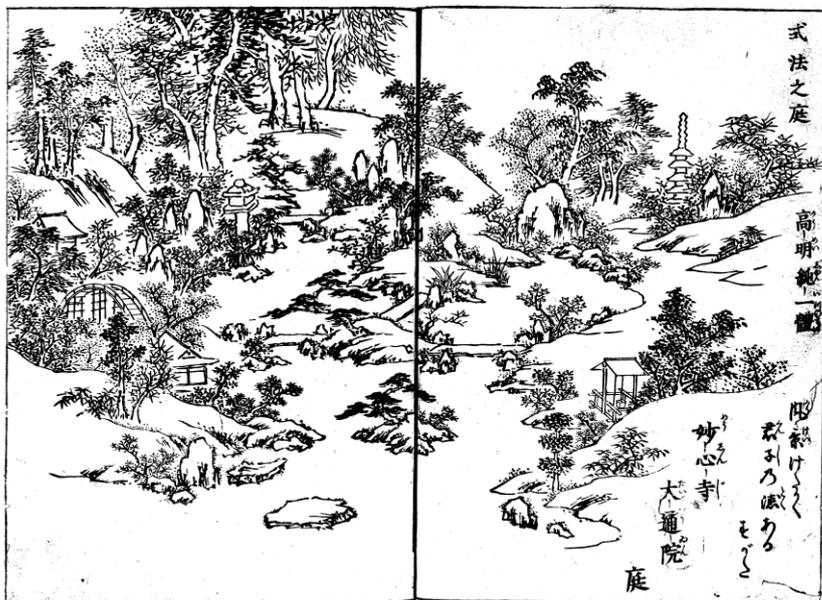
中興石燈籠之図・手洗水鉢の図

○『築山庭造伝』中巻・下巻の庭園図  
 中巻には十八の庭園図、下巻には二五図が見開きの図として掲載されている。  
 各々図にはその庭の体を現す題目と、その簡単な解説。そして具体的な庭園名の三つが文章として添えられている。例えば、中巻第一に掲載される式法之庭は「高明純一体」と名づけられて「風景けたかく君子の徳あるすがた」と解説された「妙心寺大通院庭」である。残念ながらこの庭



東山慈照院 銀閣寺の庭 現在みられる白川砂による盛砂、向月台（こうげつだい）と銀沙灘（ぎんしゃだん）は描かれていない。

の姿は現存しない。  
 この後は、三井寺上光院庭、同善法院庭、同光淨院庭、大徳寺芳春院庭、西六条河口屋庭、東山長楽寺庭、遍照心院庭など当時実在した庭を載せる。そして、「典麗静深体 きれいにして奥ふかきすがた」の庭図、「写意無窮体 意（ころ）をこめて景色窮（きわまり）なきすがた」とする図を載せ、「葉室西芳寺庭 惣体は夢窓国師作也」「会秀儲真体 神仙の住居のごとくひいでたる景」と西芳寺（苔寺）庭園を登場させる。



式法之庭 高明純一体 風景けたかく君子の徳あるすがた 妙心寺大通院庭 仏菩薩の御名配当の図と見比べると庭の構図がよく似ていて、式法之庭の意味がわかる

中巻は続いて、題名解説なしで「東山慈照院 銀閣寺の庭」、その次に図中に「鏡湖池」と示される図が続く。この図は鹿苑寺（金閣寺）の庭だが、なぜか題名解説、庭園名も無い。続いて法式之庭として小庭を三例、そして茶人庭二例載せるが、その一つは「北野松林寺 金森宗和作」である。  
 この内、現存するのは三井寺光淨院、大徳寺芳春院、東山長楽寺、西芳寺、銀閣寺、金閣寺の庭である。

下巻は誓願寺竹林院庭、本国寺中勸持院庭に始まり、いくつかの体をもつ庭の図をちりばめながら、当時の庭園としては、大龍寺辻子光徳寺庭、誓願寺中長仙院庭、丸山貞阿弥庭（相阿弥作）、清水成就院庭、大徳寺大仙院庭（相阿弥作）、壬生地蔵院庭、そして巻末最後の図を「委曲詳明体 嵯峨天龍寺庭 夢窓国師作」で締めくくる。

これらの図の内では、清水寺成就院、大徳寺大仙院、天龍寺庭園が今にその姿を伝えている。



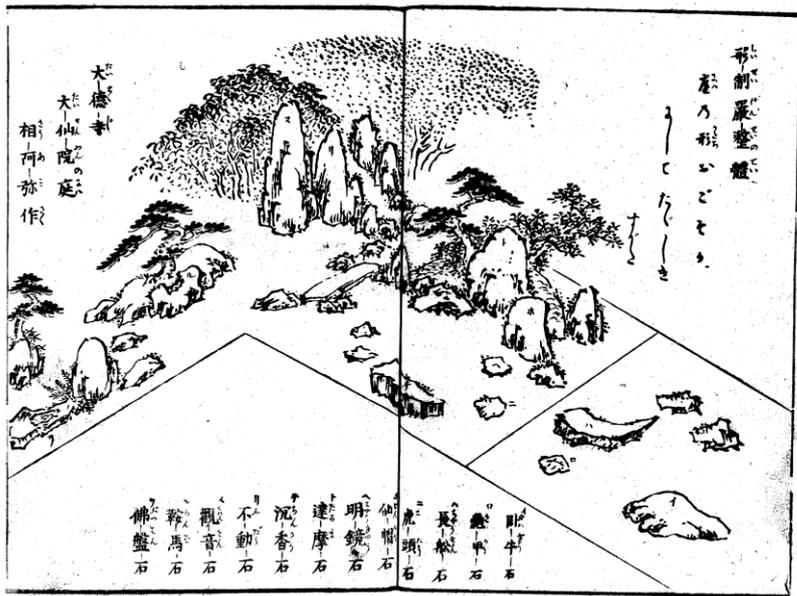
沈雄厚壯体 すくやかにしてしほらしき あしらいあるすがた 誓願寺 竹林院庭  
この姿の庭は現在の竹林院には見られない。



典雅温淳体 庭のていゆたかにのどやかなるすがた 清水成就院庭  
中央中島の池畔、橋の傍らにある「烏帽子岩」は位置は異なるが現在も庭中に見られる。

○『築山庭造伝』それ以前とその後の影響

享保二十年（一七三五）に刊行された本の内容は、それ以前室町時代にまとめられたと考えられている『嵯峨流庭古法秘伝之書』を整理して、図版を加え庭づくりに役立てたものだった。中には「山水を愛する心得の事」として、当時では四百年前、現在からは六百七十年程前の室町時代の初め頃の『夢中問答』（夢窓疎石、一三四四）の内容を手本にしていた。この心得は今も納得できるものなので、日本の庭園文化の奥深い歴史を感じる。



形制厳整体 庭のかたちおごそかにしてただしすがた 大徳寺大仙院庭 相阿弥作  
現在もほぼ同じような庭の景色が見られる。

史を感じる。  
そして、九三年後の文政十一年（一八二八）秋里籬島がこの『築山庭造伝』に、自身の文章を追加して『築山庭造伝 前篇』とし、さらに自著『築山庭造伝 後篇』を加える。  
実は、江戸時代までには様々な造園書、作庭書が流布していた。最初が十一・十二世紀頃成立の『作庭記』で、版本最後の江戸時代の書が秋里籬島『築山庭造伝 前篇・後篇』（一八二八）である。その後百年以上にわたり、この北村と秋里の本が江戸、明治・大正時代を通じて作庭に関

わる造園書の主流を占め、それは東京農業大学  
 図所館所蔵の復刻版『築山庭造伝』にまで続く。  
 復刻版が出版された大正七年（一九一八）前後  
 を含め、それ以降の話は次号『築山庭造伝 後  
 篇』を語る中で記すことにする。

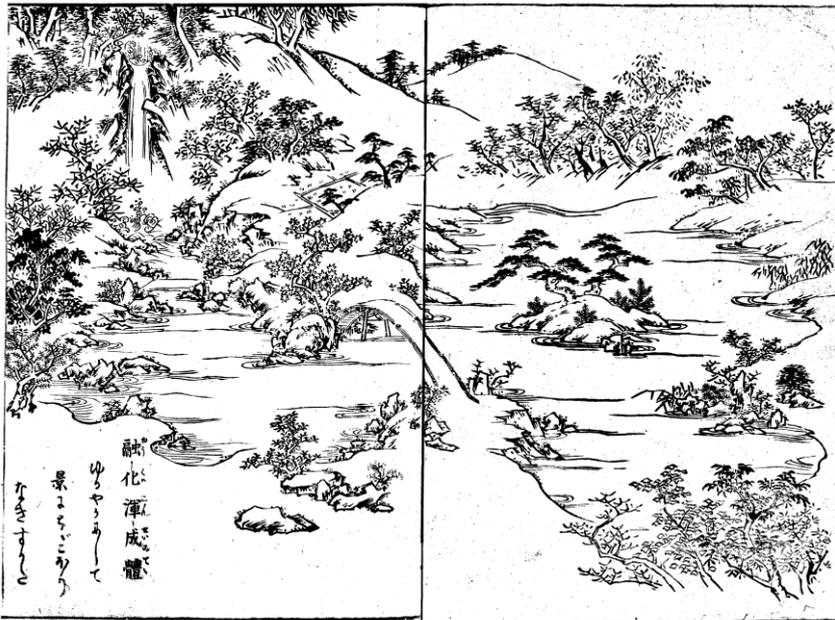
注釈

一 飛田範夫（一九八四）、造園古書の系譜、  
 造園雜誌四七（五）、五四

二 飛田、五三―五四『嵯峨流庭古法秘伝之  
 書』は『山水並野形図』の影響は受けているもの  
 短くまとまっている。庭づくりの骨格として地割  
 図を示して、場所に合わせて真、行、草と簡略化  
 することを説いているためか、人気があつて多くの  
 写本が残されている。江戸時代中期以降にも写  
 本がつくられたばかりでなく、『山水可致抄』、  
 『相阿弥築山山水伝』、『築山山水伝』、『築山庭  
 造伝』、『庭坪築形伝』、『築山染指録』の中にも  
 多くの説が取り入れられている。

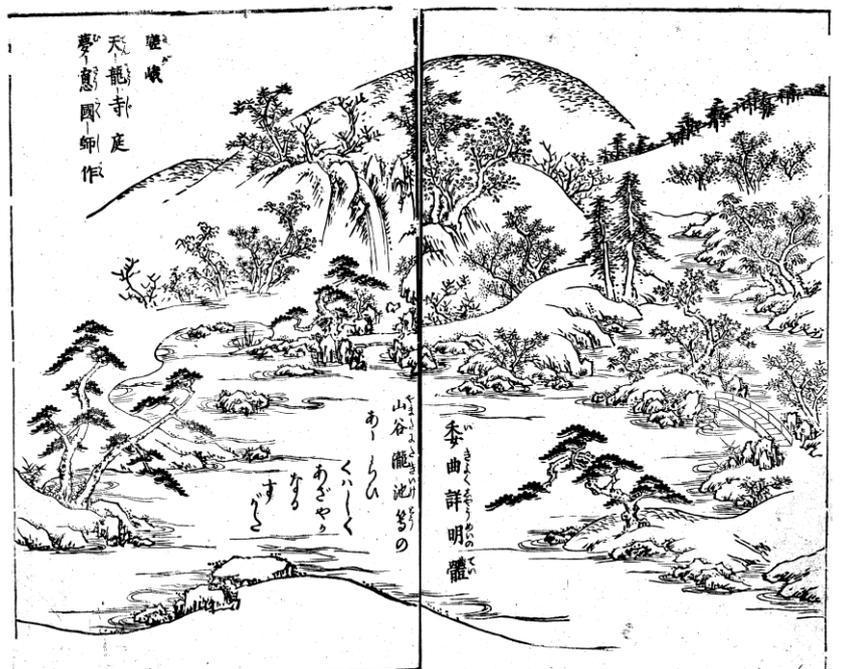
三 上原敬二『築山庭造伝 前篇 解説』、加  
 藤書店、一九七五、二十

造園科学科 教授 鈴木誠



融化渾成体

ゆるやかにして景にとどこほりなきすがた  
 のびやかで自然な姿の良い庭景色が描かれている。



委曲詳明体

山谷滝池等のあしらくはしくあざやかなるすがた

嵯峨天龍寺庭 夢窓国師作

図の中央には水落ちる滝が描かれるが現在は枯滝。

## 東京農業大学の人々(七)

### ―納豆菌の発見者・沢村真―

明治二六年(一八九三)五月、育英黌から農業科が独立し、東京農学校と改称された。東京農業大学初代学長の横井時敬は、この頃のこととして、新たに「農学博士沢村真氏を聘して教頭となし、大いに校制を改革した。全く当時の学校の状態というものはお話にならぬ位であった」と述べている。藁葺き屋根の掘立小屋が校舎であった時代のことである。ちなみに、この当時はまだ農学博士という学位はなく、明治三十一年の学位令によって林学、獣医学などと並び、初めて農学博士の学位が認められた。沢村が農学博士となるのは、明治三七年(一九〇四)十一月のことである。

沢村真は、横井時敬の同郷の後輩である。慶応元年(一八六五)六月一〇日、肥後国飽託郡花園村字井芹(現熊本市)に、熊本藩士沢村有無の五男として生まれた。郷里の学塾で漢学、英語等を学んだあと、東京に遊学し、明治二〇年(一八八七)七月、東京農林学校農学科を二期生として首席で卒業した。同級には、沢村の後任として東京農学校教頭となる豊永真里(のち農学博士、東京帝国大学農科大学助教授、朝鮮総督府中央試験所長、京城工業専門学校長)がいた。東京農林学校は、駒場農学校と東京山

林学校が合併してできた学校で、明治二三年(一八九〇)には帝国大学に併合され帝国大学農科大学となった。

東京農林学校卒業後、文部省に奉職、明治二六年(一八九三)、高知県農学校長となり、同県技師試験補、簡易農学校長を経て、明治三〇年(一八九七)七月、石川県農学校長に転じた。八月、同県技師、高等官六等、さらに明治三二年(一八九九)からは農科大学附属の農業教員養成所嘱託・講師として家畜飼養学、農業経済学などを担当した。農業教員養成所は、のち東京農業教育専門学校を経て、戦後、東京教育大学農学部となり、現在の筑波大学へとつながっている。ちなみに、大正一一年(一九二二)、横井時敬が農業教員養成所の主事(実質的な所長)を退任すると、沢村が後任の主事となった。

明治三五年(一九〇二)三月、東京帝国大学農科大学助教授に任ぜられた。翌三六年に提出



農學博士 澤村真 商議員 講師

した学位論文「蚕軟化病に関する研究」により、農学博士の学位を授与された。明治三九年(一九〇六)、文部視学官を兼任、明治四三年(一九一〇)には私費でイギリス、ドイツに留学、同年、ベルギーにおける国際栄養会議に日本委員として出席した。翌年六月に帰国すると、一月には農科大学教授に昇格し、農芸化学第三講座を担任することとなった。大正二年(一九一三)、文部省督学官を兼任した。大正一五年(一九二六)三月、定年退官、同年八月、東京帝国大学名誉教授の称号を授与された。昭和六年(一九三一)一月四日、逝去。享年六七歳。死去に際して、従三位に叙せられ、勲三等旭日中綬章を授与された。嗣子の沢村康は、九州帝国大学農学部教授で、農政学者であった。

この間、明治三三年(一九〇〇)一〇月から東京農学校商議員となり、東京高等農学校商議員、東京農業大学商議員を経て、大正一四年(一九二五)財団法人東京農業大学監事、さらに同年から逝去の日まで財団法人東京農業大学評議員を務めた。また、大日本農会との関係では、明治三六年(一九〇三)以来、常議員、参事、理事を務め、昭和二年(一九二七)一月には理事長、翌年三月には副会頭に就任し、逝去に際しては、紅白綬名誉章を贈られている。

沢村真と言えば、納豆菌の研究で有名で、明治三九年(一九〇六)、東京の系引き納豆から納

豆菌を初めて分離し、*Bacillus natto Sawamura* と名付けた。納豆菌の研究はここから始まったと言われている。また、『東京帝国大学学術大観』（一九四二年）は、農芸化学第三講座設置当時、「我が学界には食品及び消化又は栄養に関することは、未だほとんど顧みられていなかった。教授沢村真は、つとに国民保健上、食物と栄養に関する知識開拓の必要なることを痛感して、これが研究に着手し（中略、その）業績は、実に我が国の食糧並びに国民の栄養問題に対する学術的基礎を確立した」と評価している。

国際食料情報学部長 友田清彦



文藝部部長として、部員にかこまれて。  
大正11年 大学部本科卒業アルバム より



展示風景：「宇宙と芸術展：かぐや姫、ダ・ヴィンチ、チームラボ」森美術館、2016年  
撮影：木奥恵三賢  
写真提供：森美術館



『流星刀』ドローイング

## 流星刀

東京農業大学の学祖である、榎本武揚公が隕鉄で作った『流星刀』。昨年、森美術館の宇宙と芸術をテーマにした企画展でお披露目することができました。その際に、世界的にも有名なイラストレーター天野喜孝氏が、この『流星刀』を擬人化したドローイング『流星刀』を制作してくださいました。オリジナルを大切にすると天野氏は、通常複製は一切作りませんが、今回は特別にみとめてくださいました。アカデミアセンター「実学の杜」にて展示をしております。是非ご覧ください。展示期間は8月上旬までを予定しております。また、『流星刀』の実物の展示も企画中です。

本文中で\*印の付いている資料は当大学史資料室の所蔵資料です。

当資料室では東京農業大学史に関する資料をひろく収集しております。東京農業大学史関係資料や、各種情報などがございましたら、どのようなことでも結構ですので、左記までご一報くだされば幸いです。

東京農業大学

図書館 大学史資料室

〒156-8502

東京都世田谷区桜丘1-1-1

電話…03-5477-2526

FAX: 03-5477-2546